

家族がしゃべらせないから“しゃべらない人”になってしまう

修士課程修了生・青山キャンパス 小野洋子（大学教員）

丹野智文さま&山崎英樹先生

私にとって認知症は、母を介護していた頃のあれこれと切り離せない一大テーマです。

丹野先生（以下、愛情をこめて丹ちゃんと表記）への沢山の質問を胸に、青山キャンパスへ行きました。

でも、丹ちゃんの爽やかな笑顔・話しっぷりにやられて、私のちっぽけな悩みはどこかへ飛んでいってしまった、そんな爽やかな時間でした。

えにしの集いで檀上よりも等身大で親しみやすい！

やはりご本人から直接お話を聴くことって大事だなあ。山崎先生のレジメ「一人の当事者と出会うことから」にも通じることかと思います。

丹ちゃんの話の中から、私が共感・共鳴したトップ3を選ぶと、「①生きざま」「②仕事への取組み」「③オレンジドアの運営」です。簡単に説明します。

① 丹ちゃんならではの生きざまを貴く。

認知症の人を一括りにするのはナンセンス。

人生は、持って生まれた身体や才覚・気性（天性のもの）と自身が獲得する能力・経験と、どうにもできない運命とが絡み合っていてできていると私は思います。丹ちゃんの話にもそれを感じました。病気や障害や老化現象で今までできたことができなくなる時があると、自分にもどかしさやイライラ感を抱いてしまいがちですが、そのこと自体も含めてまるごと受け止めて、やりくりしていることがとても素晴らしい。

“病気になっても自分らしく”という私のモットーにびんびん響いて、感動しました。認知症をオープンにしたことで色々あるのですが、自分をよく知ってもらうことは生きてゆく上での極意だと確信しました。これは認知症に限らないことですよね。

居酒屋での「放課後」で、トップセールスマンの驚きの技「ユーザーを訪問しない」を披露してくれた丹ちゃんの笑顔は、とても輝いていました。

新著「笑顔で生きる」を読んでいると、丹ちゃんの笑顔が目には浮かんできます。

② 一家の大黒柱である丹ちゃんにとって仕事は生きがい、

誇りと責任を持って働いている。

丹ちゃんには周囲に良き理解者がいる。仕事を続けさせてくれ“認知症の丹野君ではなく”と言われた凄い社長、妻と2人の娘、同僚の若い女性社員など。

一見、環境に恵まれているように見えますが、それは丹ちゃんの愛されキャラのなせる技であり、たゆまぬ努力の賜物でしょう。

失敗しないようにメモをとり集中してことを為す姿勢、人一倍「脳が疲れること」に取り組む姿に尊敬を覚えました。かなり忘れっぽくなった自分に照らして色々と想像しながら、興味深く聴きました。

③ 家族がしゃべらせないから

“しゃべらない人” になってしまおうんだよね。

オレンジドアは、認知症カフェなどの居場所と違って、当人にとって大事な情報につながるきっかけ（ドア）です。だから、家族とは別々の場を設け、当人の場には丹ちゃんしかいません。サポートする事務的なスタッフも置かないのだそうです。

なんて素敵なのでしょう。

私は認知症の母の家族として、たくさん失敗をしてきました。振り返ればの気付きなのですが、居酒屋でその話をしたら、丹ちゃんは「認知症になった本人は不安なんだよ。お母さんとのことを悔やんでいないで、それを次の人に活かしてね」と言ってくださいました。本当にそうです。丹ちゃんを見習って、認知症を正しく理解して接することができる人が一人でも増えるよう、私ができることをしなくちゃ！

沢山のパワーをいただきました。

最後に、丹ちゃんは講座の90分間ほぼしゃべりっぱなしで（その前にはゼミでも話し）、放課後も我々の質問に間髪入れずにお答えくださったので、さぞかしお疲れでは？と少し心配になりました。

私もよくハイテンションの時は疲れ知らずで話しまくり、忘れた頃に疲れがでたりします。

でも、心にエネルギーをもらった後だと心地よい疲れと感じます。若輩者の自分と比べるのも失礼ですが、今回の丹ちゃんもそうでありますように。

私に関わっている機関誌に新著『笑顔で生きる』の紹介文を書きますとお伝えして名刺を渡したところ、後日、丹ちゃんからフェイスブックのお友達申請をいただきました。

講師からご連絡いただくなんて、ありがたくて涙が出そうです。

笑顔の丹ちゃんにまたお会いしたい、と心の底から思いました。自分の記憶力に自信がもてないことが増えた今日び、オレンジドアの当事者の扉の方を開いてみたくなっています。

丹ちゃん、これからもよろしくお願いします。

本日は素敵なお話をありがとうございました。

長くなってすみません！